

検討しました。頭部の異常として、小頭、短頭、眼開離、内眥贅皮、鞍鼻、大開口、舌の脱出、を50%以上に認めた。また従来 of 発表と異なり小耳症、小顎症、短頸、心奇型、ヘルニア、性器發育不全などの異常は認めなかつた。四肢については、胎児性手、厚く短い指、親指小指の短縮を認めたが、この点については従来 of 発表に一致していた。本症発生に対する出生時両親の年令の影響を検討したが、転座型に比して 21-trisomy 型は、両親の年令の上昇を認めた。各年度別における出生時母親の年令分布を考慮してその期待値を求めたところ母親の年令による因子が関与していることが推測された。父親の出生時年令の影響については有意差は認められなかつた。

指掌紋理については、Beckman の成績を応用して得点表を作製し、Down 症候群の特異性を表現出来るか否か検討したところ正常健康人との間に有意差をもつて D.S. score の差を認めた。このことより典型的なる Down 症候群を徐いて染色体分析が不可能な場合、不全型を示す本症の診断に際し、応用しうる可能性を有するものと考えられる。

157. 産科婦人科領域における染色体研究

(新潟大) 鈴木 雅洲, 岡田 正俊, 小原沢 弘

佐々木太郎, 田中 早苗, 櫛谷 岩夫

染色体研究は、その技術の安定とともに飛躍的に発展して来た。中でも産科婦人科領域では、各種性異常症例、先天異常症例、原発性不妊症症例、習慣性流産、自然流産児、電離放射線の影響、悪性腫瘍など対象が多く、本研究に対する深い知識が必要とされる。

本報告では、この様に近年とみに臨床的関心が高まっている「染色体研究」について産科婦人科学領域での現況を知り、今後染色体研究を行なおうとする臨床家の一指標となることを目的としてアンケート形式により得た成績について発表する。

対象は、世界教育機関73箇所、日本教育機関34箇所、米国非教育機関 7 箇所、日本非教育機関 20 箇所、合計 134 箇所である。以上について、(1)細胞遺伝学についての関心度、(2)染色体分析についての技術上の問題点、(3)染色体分析数、などを主体とした10項目について検討した。